

沙石集に於ける神佛関係の一致

平

祐

史

(一)

鎌倉仏教の宗教改革は、唯宗教改革なる言葉で終るものでなく日本佛教の将来を、示唆するものがあつた。今茲で論述する迄も行く、その大勢は源信以来空也良忍等によつて喝えられた念仏往生は、法然によつて浄土教の徹底を期し、茲に新生命を得、栄西、道元によつて将来されたる禅は、武士的修養と相俟つて栄元、日蓮或は一遍等の新しい宗教の出現を見、夫々日本の展開を進めつゝあつた。かくて日本に於ける大衆佛教の各宗派は、「天台は皇族、真言は公卿、禅は武士、浄土は平民」と云われるが如き各々の宗教支持層の大概を示すに至つたのであるが、かゝる日本仏教各宗を通じてその発展の要因の一つを指うものと考えられるものは、各々宗教支持層の中に育する民族固有の神觀念とも云うべき神祕思想が、深く仏教の中に交渉しつゝ、仏教発展の一つの力となつてゐることに注目するのである。

かゝる思想的論述の方法として、先づ考えねばならぬことはその資料の取り扱ひ方であつて、特に庶民の間で「思想」となる資料を把握することは、先づ難事と考えねばならぬ。従つて、直接的資料を把握することは、民俗学を初めとする其の他文化史的方法に依らねばならぬとし

て、今茲に於ては主として、間接的資料を通じて理解を可能にしなければならぬ。かゝる意味に於いて、間接的資料たる「沙石集」を扱わんとする時、先づ沙石集は説明的精神⁽¹⁾（註傍黄筆香）が傳はれた鎌倉期文学の風潮を代表する作品の一と言われて居り、その説明的精神の流れを窺ひ沙石集の序文に、

「狂言綺言のあだなる戯を縁として、仙果の妙なる道に入れ、世間淺近の賤き争をたとえ」として、勝義の深き理を知らしめんと思ふ。⁽²⁾

と我が國及び中國の政争を挙下、又世間の見聞をも録して卑近な説話を以つて、巧みに民衆に接近せんと試みて居り、その著述の意趣を卷頭に明瞭に述べている。従つて此の著述の意趣をもつてしても、民衆と仏教との連りを、更に仏教を民衆思想の中に融合せしめたところの民衆に理解出来得る當代の仏教思想をこの沙石集が持つ間接的資料を通じて、耳窺にすることが出来るのではなからうか。

處で、その云う民衆に理解出来得る仏教とは、特に「沙石集」に於いて盛られる和老方便であつて、そこに和老同座思想に於いて文勝する神仏思想を見ることが出来、同時に当該社会思想に就いて「沙石集」がよく代表するものであると云えよう。然らば当該社会とは先づ沙石集の成立期を見る時、無住法師によつて弘安二年（西暦一二七九）最書が始められ、同六年（西暦一二八三）の秋、終焉したと云われている。従つて沙石集の当該社会は、弘安の役前後に當り、鎌倉中期に位するものと云えよう⁽³⁾、然し尚、その書に盛られる種々の説話に於いて当該時代より、更にさかひのつた見聞をも録していること等を想起する時、はゞ鎌倉期仏教思想の少部分を知らしめられる事に氣附けるのである。

(註)

- (1) 西田直二郎著 「日本文化史序説」 五七版、四〇五頁 参照、
- (2) 平樂寺本校註 「沙石集」 「序」 一頁、
- (3) 「同」 「解説」 二頁 参照、

(二)

無住が「沙石集」の巻頭に明言してゐる如く、民衆の中に融合せんと図つた方便は、紐老厠座思想に於いて交渉する神祕思想で、民間に在る特有の神觀念と融合しようとしてゐる。その融合の途には和老同座思想の云う「暫く無識の智光を益し煩惱濁世の塵に同いて⁽¹⁾」、「從^{いぢら}なる⁽²⁾」等と兼め虚き世事を⁽³⁾はし⁽²⁾し或は「経論の明なる文を引き或は先賢の残せる語をか⁽³⁾して、以つて仏教を民衆生活に融合せんと努力して居る。

無住は民間にある神觀念と融合すべく、その方便の使用に當つては、巧みに神祕思想を交渉せしめてゐることは、沙石集巻一に亘つて見られるが「沙石集」上ノ一、大神宮御事⁽¹⁾に見られる「天岩戸」の故事に就いては、

「都ては大海の底の大目力印文より争あこり、内容下宮は都卒天也、高天原とも云えり神代

の事皆由有にこそエヌ。⁽⁴⁾と真言而部神道の神仏習合説を立て、いる。

即ちこの習合説と更に、

「真言の意は都牟とば内證の法府宮、密云國とこそ申なれ、彼内證の都を出て、日域に迹をたれ給ふ政に、内宮は胎藏の大日、四重曼荼羅をかたどりて、中略一外宮は金剛界の大日、或は阿弥陀とも習侍也云々。⁽⁵⁾」

(註傍史筆吾)

と、金胎二教の両部或は淨土教の絕對春阿弥陀仏等をも合せて神祇と交渉し、且つ、神仏の同に推し、謂本地垂迹の關係を認めて、両者を一体と見ている。「沙石集」卷一、上ノ二、「空置解脫房上人太神宮参詣之事」に冠られる如く、解脫房上人は菩提心祈請の爲に太神宮に参詣し、「我今度出離せしめて人間に生れは、当社の神宮とままれて、和老の方便を仰ぐべし。⁽⁶⁾」と、誓つて居り、「同」卷一、上ノ三「出離を神明に祈る事」等も同じく、「和老阿塵こそ諸仏の慈悲の極⁽⁷⁾りと信じている。かゝる説話に物語る和老同塵思想は、平安時代初葉以来漸次発達し、その末期には一応の体制を整え、神に於ける本地仏の指定に見られる八幡を、歡迎又は阿彌陀仏、加茂を正観音、春日を不定觀乘觀音の如く立、神に菩薩号を、八幡宮には護國靈驗威光神通大自在王菩薩、大洗並に西列磯前神は薬師等と、林するが如く、又「續本朝往生伝」の「真縁上人」の伝には、

「生身之仏即是八幡大菩薩也謂其本覺則西方無量壽如来也⁽⁸⁾」と見られる。

此の様に日本仏教発展過程、特に鎌倉期を通じて鎌倉仏教に至る間、著しい神仏習合説の発達を見ている。然るに鎌倉仏教の新興宗団興起の発展的契機を創上したと考えられる淨土教に

たいて、特に法然、親鸞の浄土教は神祇の問題に就いて、所謂、一向専修念仏的立場から、あまり重きをなさず神祇は念仏を尊信し、擁護すると云う見解の程度であつた。⁽⁹⁾ かゝる神祇に対する浄土教の伝統的立場に對して、無住は「沙石集」卷第一、下ノ十、「浄土門人暨神明家等」に記られる。「又そ念仏家口濁世相応の要門出離の直路なり、誠に目出き家なるほゞに余行余家を嫌ひ、余ハ仏菩薩神明までも輕しめ、諸大衆ハ法門をも謗る事有り⁽¹⁰⁾」と云ひ、従つて「林各の外に往生せずという教はひがみにや⁽¹¹⁾」と、更に「ねんごろに念仏の功を入て、余行余家を謗り、余ハ仏菩薩神明を輕ろしむること有べからず⁽¹²⁾」と、浄土家ハ一向専修念仏を諸行往生的見解でもつて、批難している。こうした無住の浄土教に對する批判は、正統依の至典を有たない禪侶としての立場に於いてもつともなる當代の事であつたらう。しかゝ法然の元久元年十一月七日の七箇條起請文、

「一可停止末魔^{下レ}一句文。奉破^{上レ}眞言止觀。謗余仏菩薩事⁽¹³⁾」

の制裁と合せ想起する時、念仏家徒の神明輕視の風潮を首肯する事が出来る。こうした念仏家徒の神祇輕視の無住其の他の世評に「本願寺文書」弘安八丑八月十三日に記された、與泉僧堂阿の葉制十七箇条中に、

「一、念仏マフシナカラ神明ヲカコレメタマツル事⁽¹⁴⁾」

の條の警告は、先の法然の七箇條起請文の制裁と同様、神明を輕視する傾向を持つ浄土家徒への反省をうながすものであり、念仏を固有の神觀念を有つ民衆の現実生活の中へ融合せんとする傾向を見せている。

かゝる浄土念仏系の神祇輕視の思想に對して、一邊の唱導する所謂、「神祇の念仏か」ある

。これは一遍が、「我が法門は熊野の御夢想の口伝也。」（幡州法語）と言つたやうに、熊野権現の示現を受け念仏の真意に到徹したと云われて居り、尤の浄土教徒の神祇監視の風潮に對し、此の一遍の神祇思想は日本浄土教思想史上、注目すべき問題である。⁽¹⁵⁾従つて、一遍の融通念仏の下に説く神祇の念仏は、神祇と交渉すること意味である事に於いて、かの一向専修の徒が神祇監視の世評を蒙つてゐる事実に對して、念仏と神祇との關係が解決、更に固有民族信仰を通じて念仏の民間浸透の役割に重要な位置を示してゐた事は、充分想案し得るであらう。

次にこゝに一遍の神祇より「示現」或は「御夢想」を得たと云われる事柄は、当代を通じて非常に多くの例を見る事が出来る。

前述の「真經上人」伝或は「沙石集」に於ても、卷第一、上ノ二「笠置解脱房上人太神宮参詣事」同「卷第一、三」出題「神明祈事」等に見られる神祇が僧侶に与える示現である。かゝる神祇の僧侶に對する示現は、当代に流行した思想と見なければならぬが、神祇と僧侶の關係に於いて見出すことが出来る事柄として「伊弉」と僧侶の關係で、沙石集に物語れる「笠置解脱房上人太神宮参詣事」或は、「太神宮御事」など、太神宮と、僧侶との關係が顯著に見られ、而して、神話乃至内宮外宮と仏教との關係を、真言兩部神道説より本地垂迹思想を説き、それを以つて、「まことしく仏道を信じ行はんことこそ太神宮の御心にかなふべきに」と、民衆に本地の利益を説き仏教信仰の方便に振る言え林としてゐる。

僧侶が太神宮に参詣した丁史的争事は、多々あるが、鎌倉初期に於いて最も劇企的争件として、文治二年四月、後醍醐天皇の東大寺創建に伴う太神宮参詣はあまりにも有名である。

「東大寺建立供養記」に、

「上人夢詣伊勢太神宮、祈請造寺事、故作是念、若我願滿足、当示吾圖時非時非現、而
宝殿之前、有東帶之俗人、又幼童也、吾上人讓甲、語上人言、欲遂其願可令我肥云々
夢覺之後、作是念、以彼若之滋味增神明之忘業云々」⁽¹⁷⁾ (傍矣注筆者)

「文治二年神宮大般若經軌疏記」に、

東大寺聖人夢宮之次、依有夢想之告云々⁽¹⁸⁾

(註)
(傍矣筆者)

「同」

夢詣由未詳

(文治二年歲次丙午仲春二月)

同廿三日梓夜太神示現云吾近身疲力衰、難成大事、若欲遂此願は早可令肥我身云々
聖人夢覺云々⁽¹⁹⁾ (註傍矣筆者)

等と見られる如く神社の示現を受けている事柄である。沙石集に於いても亦重源に於ても然りの如く、示現は当代に流行した一つの思想傾向であることは、充分想像し得るもの加あつて、彼が往生位に於いて、臨終に奇跡を見られる思想と同様々傾向をもつものではないかと考えられ、かゝる神社の示現は、固有の神を通じて、僧侶の宗教体験の極度に高まつたことを、表現するものと云えようし、かゝる宗教体験の度合の問題は、宗教心理学にゆづるとして、固有の神を媒介として、仏教を説かんとした和光阿闍思想は、仏教が漸次日本化し、それは同時に仏教が固有思想と温存する民衆生活の中へ融合したことを意味し、発展の方向を決定する、あるものを暗示して居るのではなからうか。

尚、本論は不備な点多々ありますが、諸賢の御指導を待つ次第です。

- (1) 模範仏教辭典 「和老同慶」の廣参照
- (2) (3) 「沙石集」序 一頁
- (4) (5) 「沙石集」卷一、上ノ一、太神宮御事、二頁
- (6) 「同」 卷一、上ノ二、玆置解脫房上人太神宮參詣事、四頁
- (7) 「同」 卷一、上ノ三、出離神明祈事、七頁
- (8) 統本朝往生伝、統淨全、二六頁下
- (9) 宮崎田澤氏著 「中世仏教と庶民生活」 一七頁参照
- (10) 「沙石集」卷一、下ノ十、「淨土門人經神明蒙罰事」 三〇頁
- (11) 「同」 三一頁
- (12) 「同」 三一頁
- (13) 法然上人「七箇條証請文」 法然上人全集、四〇二頁
- (14) 宮崎田澤氏著 「中世仏教と庶民生活」 六三頁参照
- (15) 「同」 一〇——一二頁参照
- (16) 「沙石集」卷一、上ノ一、太神宮御事、三頁
- (17) 「大日本史料」 卷四編之一、三〇〇頁
- (18) 「同」 三〇一頁
- (19) 「同」 三〇一頁——三〇二頁

